

男性 0 人

女性 2 人

その他 0 人

サツキ……OL。知的な感じ。

澄子……幽霊。ほんわかした感じ。

1. サツキ「ただいまー」

2. 澄子「お帰りなさいー」

3. サツキ「あー疲れた疲れた。もう、毎日残業で嫌になっちゃう」

4. 澄子「お疲れ様です。ビール冷えていますよ。それとも、先にお風呂にしますか？」

5. サツキ「うーん、まずはビールにするかなあ」

6. 澄子「簡単なものですけど、おつまみもありますよ。オクラとお豆腐を、小さく切って混ぜ混ぜしてみました。ヘルシーで美味しいと思うのですが」

7. サツキ「わあ、それは素敵だなあ。じゃあ、まずはビールと。(ビールを飲む音) ごくっ。ごくっ。ごくっ。ふはあ！」

8. 澄子「サツキさんって、本当に美味しそうにビールを飲みますよね。うらやましいなあ。あたし、ビール飲めませんから」
9. サツキ「って言うか、澄子さん、物も食べられないよね」
10. 澄子「そうですねえ。我々は、香りを楽しむだけです。それが食事代わりなんですよ」
11. サツキ「あ、あのさあ……澄子さん」
12. 澄子「あら。急にあらたまって何でしょう？」
13. サツキ「そろそろ、成仏してみない？」
14. 澄子「え」
15. サツキ「って言うか、おかしいよ！ こんな幽霊との共同生活は！ お願いだから、そろそろ出て行ってえ！」
16. 澄子「そう言われましてもお。先に住んだたのは、あたしの方なんですし」
17. サツキ「ええ？ 出て行くのは、あたしの方だって言うの？」
18. 澄子「そ、そんなことは言ってませんよお。でも、あたしがいて便利でしょう？ こうしてご飯も作りますし、お洗濯もしますし、お掃除もしますし、朝だって低血圧なサツキさんを必ず起こしているじゃないですか」
19. サツキ「だから、必ず起こしてくれるのは嬉しいけど！ 部屋中がピシピシ鳴ってるのは怖いよう。怖くてベッドから飛び起きてるだけなのよう」
20. 澄子「あの音は、専門的にはラップ音って言うんですよ？」
21. サツキ「そんなことはいいいから！ お願い、出てってよお。こんなことじゃ、彼氏も家に呼べないのよお」
22. 澄子「わあ！ 彼氏さんができたのですか。あたしにも紹介してくださいね」

23. サツキ「紹介しません。そんなことしたら、一発でフラれます。って言うか、靈感がある人以外には見えないんでしょ？」
24. 澄子「夜中に鏡をのぞけば、普通の人でも背後に見えることがあるのです」
25. サツキ「怖いよ！」
26. 澄子「じゃ、じゃあ、あたしは姿を消してますから。それなら2人で、思う存分ラブラブできますよね？」
27. サツキ「幽霊がいるとわかってるのに、そんなことできるわけないでしょう。あーん。もう嫌だあ。どうやったら成仏してくれるのよう」
28. 澄子「さあ、わかりません。自分でも、なぜ成仏できないのかわからないのです」
29. サツキ「やっぱり、きちんとお祓いしてあげようか？」
30. 澄子「あれは苦しいからいやなんです。許してください」
31. サツキ「でも天国に行けるのよ？ 天国って、いいところだと思うなあ。ちよつと苦しなくても、我慢すればいいんじゃないかなあ」
32. 澄子「ひどいです、サツキさん！ そんな人だとは思いませんでしたっ」
33. サツキ「あたしの生活をめちゃくちゃにしてる、澄子さんも十分にひどいのよ？」
34. 澄子「あ！ そう思っていたのですか。いいですよお。……祟りますから」
35. サツキ「あーん！ それだけは言っちゃだめえ！ あたしはね、念願のひとり暮らしなの。友達を呼んでたこやきパーティーしたり、彼氏を呼んでラブラブしたりしたいの」
36. 澄子「あたしだって、友達を呼ぶのを我慢してるんですよ？ じゃあ呼んじゃいますからね。」
37. サツキ「絶対にだめえ！ もうわかりました。あたしが一生懸命に手を合わせますから、それで成仏してください。お願いします」

-
38. 澄子「だからあたしも、それで成仏できるのかわからないのです」
39. サツキ「とりあえず、やってみよう？　ね？　澄子さんに向かって手を合わせればいいのかな？」
40. 澄子「うーん。何だかそれは、あたしが偉くなったみたいで恥ずかしいです。もっと別なところに手を合わせてください」
41. サツキ「じゃあ、どこに向かって？」
42. 澄子「そうですねえ。あたしが、ぶら下がっていたのは確か……」
43. サツキ「あーん！　やっぱり自殺だったんだあ。今まで怖くて聞けなかったけど、そういう死に方だったんだあ。だから幽霊になっちゃったのねっ？」
44. 澄子「あ、幽霊差別。殺されちゃった人だって、幽霊にはなりますよ？」
45. サツキ「そうかも知れないけど。ねえ、どうして自殺しちゃったの？　その理由を解消してあげたら、きつと成仏できるんじゃないかしら」
46. 澄子「なんだったかなあ。もう忘れちゃいましたねえ」
47. サツキ「忘れちゃうものなの！？」
48. 澄子「きつと、たいした理由じゃなかったんですよ」
49. サツキ「たいした理由もなく自殺しちゃだめーっ！」
50. 澄子「あ」
51. サツキ「思い出した！？」
52. 澄子「ゴキブリがいます」
53. サツキ「ああ！　いや！　いや！　あたしゴキブリはだめえ！　お願い、澄子さん、退治してえ！」

-
54. 澄子「あたしと同居してくれます？」
55. サツキ「するする！ いつまでも、好きだけいいからあ！ あーん、はやくう！」
56. 澄子「じゃあ。えい！ はい、退治しましたよ」
57. サツキ「うう。情けない。幽霊よりも、たかが虫の方が怖いなんてえ。あれ？」
58. 澄子「いつまでも……好きだけ……いてもいい……」
59. サツキ「澄子さん？ 光ってる！ 身体が光ってるよっ」
60. 澄子「あは。何だか嬉しくなったら、成仏できる気がしてきました」
61. サツキ「え？ そうなの？」
62. 澄子「ビン缶、ペットボトルは水曜日、燃えないゴミは金曜日。忘れないくださいね？」
63. サツキ「す、澄子さん……」
64. 澄子「では、これにて。長い間、お邪魔しました」
ちよつと間。
65. サツキ「ばか。いきなり成仏しなくたっていいじゃない」
ちよつと間。
66. サツキ「あ。オクラとお豆腐、美味しいな……」
67. 澄子「混ぜすぎなのがポイントです！」
68. サツキ「って成仏してないのかよ！」